ISSN 1347-751X

河川環境総合研究所資料
第21号

日本の河口写真集

2007年3月

財団法人 河川環境管理財団
河 川 環 境 総 合 研 究 所

発刊によせて

河川の汽水域は、陸と海の接点に位置し、比重等が異なる淡水と海水が混合し、かつ周期的に発生する潮汐と波浪などの影響を受け、常に変動する特殊な環境を有している。このため、淡水域に生息する生物や海水域に生息する生物に加え、汽水性の生物が生息・生育する多様な生態系が形成されている。反面、地形の変化等人為的なインパクトを受けると、流れや底質の動きが容易に変化することから、環境への影響を受けやすいといった変化しやすい場である。このような特性を有する河口部は、古くから漁港、港湾の整備や干拓地として開発され、高度経済成長期に入ると干拓や埋め立てが盛んに行われ、地形の改変が進んだ。河口部の地形改変の状況を記録として残すことは、汽水域環境の変遷を知る上で重要である。

そこで、全国の直轄河川を対象として、河口部の人為的インパクトを比較的受けていない時期の空中写真と人為的インパクトを受けて河口部の地形がかなり改変された近年の空中写真を収集した。河口部の空中写真を全国的範囲で収集し、地形改変の状況がわかるように整理したものは本写真集が最初であると思われる。今後、各種の人為的インパクトがさらに加えられ、河川汽水域における環境が変化した場合の情報を検討するにおいて、本写真集を活用していただければ幸いである。

なお、本写真集の作成にあたり、河口写真および汽水域の分類等の資料は「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書（平成 16 年 5 月）」（財団法人河川環境管理財団編集）作成のために収集したもの、関係事務所より新たに収集したものおよび国土地理院撮影の空中写真を複製（承認番号 平 19 総複、第 172 号）したものを使用しました。ご協力頂いた関係機関並びに関係者各位に深くお礼を申し上げます。

平成 19 年 3 月

財団法人河川環境管理財団
河川環境総合研究所
所長　山本晃一

目　　次

１．河口部の現状と課題　　1

２．全国の主要河川の河口　　2

　２．１　汽水域の分類　　2

　２．２　河口写真　　6

　　北海道　　7

　　東　北　　23

　　関　東　　37

　　北　陸　　47

　　中　部　　61

　　近　畿　　77

　　中　国　　89

　　四　国　　105

　　九　州　　115

1．河口部の現状と課題

我が国の地形的特性から、人の利用しやすい平野部は主に沖積地からなり、氾濫による被害を受けやすく、このため洪水を安全に流下させるための河口の維持は重要であり、築堤、河道掘削・浚渫、放水路、導流堤等多くの治水事業が行われてきた。また、河口部は古くから漁港・港湾の整備や農地として開発され、高度成長期以降は干拓や埋め立てによる土地造成が行われ、建設骨材として砂利が採取されるなど、河口部の地形改変が進んだ。そして集積・高密度化した都市を守るためにさらなる河川や海岸の改修が進められてきた。

このような開発と都市化の進展により、河川や海岸の地形の直接的改変に加えて、用水量の増大による河川流量の減少や汚濁排水による負荷を受けてきた。汽水域は、これらの人為的インパクトにさらされ、環境条件は大きく変化した。

汽水域における様々な人為的インパクトは生物の生息・生育の場を消失させ、水質の汚濁がさらにそれを加速させ、汽水域の生態系は大きな痛手をこうむってきた。

近年、環境の重要性が認識されるようになり、動植物の生息・生育環境の維持、種の多様性の保全等が重要なテーマとなっている。人為的インパクトにより、これまでも水質の汚濁や海浜の縮小等、人の生活に係わる様々な問題が生じてきたが、現在は生物への配慮、そして生物の良好な生息・生育環境の維持、再生の視点からの問題が多く顕在化している。

汽水域は人にとっての生活の場、生産活動の場、水との触れ合いの場であるのみでなく、動植物にとっての貴重な生息・生育の場であることを認識し、河川環境の保全、再生に努めることが必要となっている。

写真１　河口開発の一例

２．全国の主要河川の河口

汽水域は物理的・化学的・生物的環境が複雑に関連する場であり、場の特性は種々の要素により表現される。「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書」（平成16年5月）の中では、物理的特性をもとに汽水域の分類がなされており、本写真集においてもこれに従っている。

２．１　汽水域の分類

汽水域を規定する多様な要素の中から、潮位変動、波浪及び河床材料の代表粒径毎に、日本の汽水域を次のように大まかにタイプ分けし、表 2-1 にタイプ分けした河川のグループ、図 2-1 にタイプ分けした河川の位置図、図 2-2 に潮位差と代表粒径による河川の散布図を示す。

①　日本海に流入する河川

日本海に面した河川で、潮位差 0.6 m以下とすると小さいグループであり、泥・砂河川と砂利河川がほぼ同数である。流域面積をみると、砂利河川は 211 ～ 1,190km^2、泥・砂利河川は 270 ～ 14,330km^2 となっており、砂利河川に比較的流域規模が小さい河川が多い。

＜緑色で示したグループ：泥・砂 23 河川、砂利 10 河川の計 33 河川＞

②　瀬戸内海の東部に流入する河川

瀬戸内海に流入する河川で、潮位差 0.6 ～ 2 m程度のグループであり、泥・砂河川と、砂利河川が 2 河川ずつとなっている。

＜青色で示したグループ：泥・砂 2 河川、砂利 2 河川の計 4 河川＞

③　太平洋、オホーツク海に流入する河川

太平洋、オホーツク海に面した河川で、潮位差 0.6 ～ 2 mのグループであり、泥・砂河川と砂利河川がほぼ同数である。流域面積をみると、砂利河川は 508 ～ 3,990km^2、泥・砂河川は 464 ～ 16,840km^2 となっており、砂利河川に比較的流域規模が小さい河川が多い。

＜空色で示したグループ：泥・砂 16 河川、砂利 15 河川の計 31 河川＞

④　東京湾、伊勢湾、瀬戸内海に流入する河川

東京湾、伊勢湾、瀬戸内海に流入する河川で、潮位差 2 ～ 4 mのグループである。球磨川も含まれている。このグループはさらに河床材料によって泥・砂河川と砂利河川に分けられる。流域面積をみると、砂利河川は 140 ～ 1,465km^2、泥・砂利河川は 235 ～ 8,917km^2 となっており、砂利河川に比較的流域規模が小さい河川が多い。

＜橙色で示したグループ：泥・砂 18 河川、砂利 7 河川の計 25 河川＞

⑤　主に九州沿岸に流入する河川

九州沿岸の河川で、有明海と瀬戸内海に流入する河川を除く外海に面した河川であり、潮位差２～４ｍ程度である。これらのほか、このグループには、天竜川、菊川も含まれる。

＜黄色で示したグループ：泥・砂６河川、砂利２河川の計８河川＞

⑥　有明海に流入する河川

有明海に流入する河川で、潮位差４ｍより大のグループで泥・砂河川である。

＜桃色　で示したグループ：８河川＞

【タイプ分類に用いた指標】

＜潮位変動の大きさ＞

河口近傍潮位観測所における直近１ヶ年の朔望平均満潮位と朔望平均干潮位との差を用いた。

＜波浪の大きさ＞

河口の位置により内湾型と外海型の別を判断した結果を用いた。内湾型は、東京湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海等の内海に流入する河川で、河口砂州が形成されにくい。一方、外海型は外海に面し、波浪により河口砂州が形成されやすい。

＜河床材料＞

河床材料から砂・泥河川と砂利河川の別を判断した結果を用いた。

低水路における概ね１km 毎の粒度試験結果から、D_{60}（ 60%粒径 ）を求め、河口近傍の値を見て 5mm を超える箇所が２ヶ所以上ある場合、あるいは 5mm を超える箇所は１ヶ所であるが、他の地点も同等の値を示す場合に砂利河川とし、砂利河川以外を砂・泥河川とした。

（「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書　平成 16 年５月」より）

表 2-1　タイプ分けした河川のグループ

潮位差	内湾型		外海型	
	泥・砂河川	砂利河川	泥・砂河川	砂利河川
4m超	本明川 六角川 嘉瀬川 白川 矢部川 菊池川 緑川 筑後川			
2m～4m	鶴見川 鈴鹿川 小瀬川 佐波川 雲出川 大分川 豊川 芦田川 庄内川 多摩川 太田川 旭川 矢作川 球磨川 吉井川 高梁川 荒川(関東) 木曽川	土器川 重信川 櫛田川 山国川 宮川 肱川 大野川	菊川 松浦川(1.964) 肝属川 遠賀川 川内川 大淀川	小丸川 天竜川
0.6m～2m	大和川 淀川	揖保川 加古川	番匠川 高瀬川 名取川 鳴瀬川 綱走川 久慈川 五ヶ瀬川 常呂川 馬淵川 釧路川 那珂川 吉野川 阿武隈川(2.11) 十勝川 北上川 利根川	物部川 安倍川 狩野川 那賀川 渚滑川 鵡川 大井川 沙流川 湧別川 仁淀川 紀の川 相模川 四万十川 熊野川 富士川
0.6m以下			留萌川 梯川 常願寺川 小矢部川 赤川 関川 庄川 千代川 円山川 尻別川 由良川 斐伊川 岩木川 神通川 九頭竜川 江の川 米代川 雄物川 天塩川 最上川 阿賀野川 信濃川 石狩川	北川 天神川 黒部川 後志利別川 姫川 手取川 日野川 高津川 荒川(北陸) 子吉川

注）平成 14、15 年度のアンケート調査及び潮位より作成したものである。（　）書き数字は、潮位差のタイプ分けの基準値からはずれている場合に特記したものである。各欄の河川は流域面積の小さい順に並べてある。

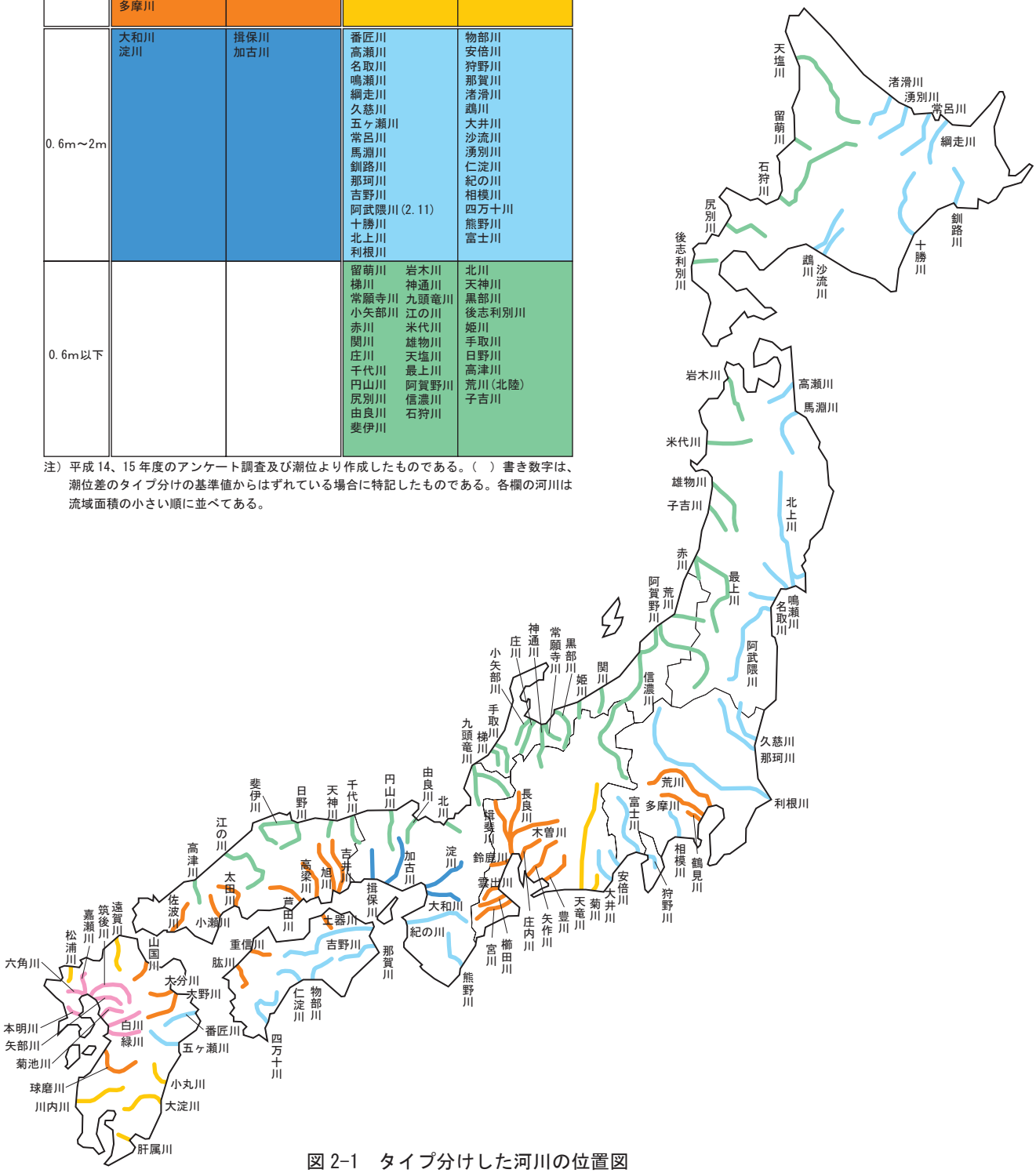


図 2-1　タイプ分けした河川の位置図

（「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書　平成 16 年 5 月」より）

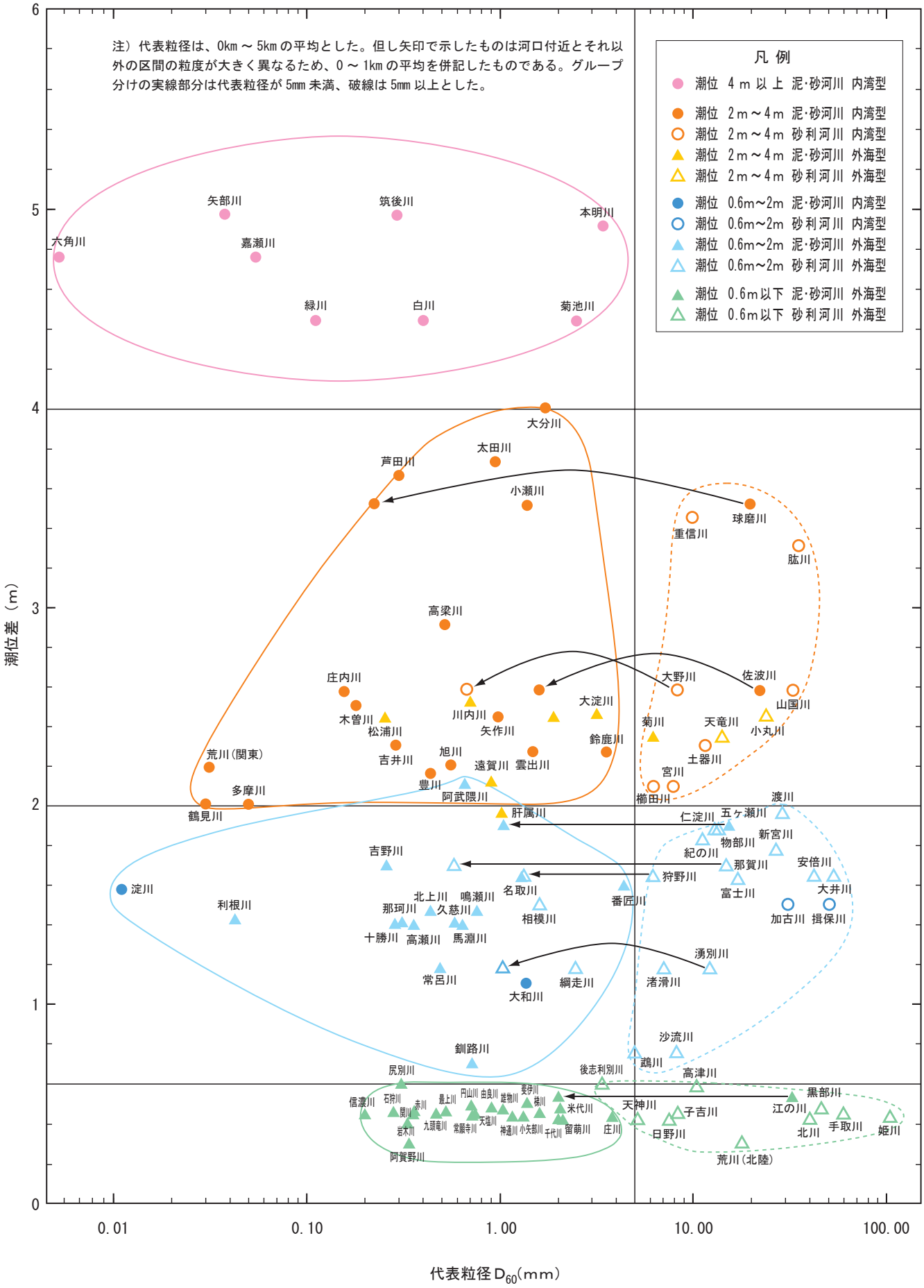


図 2－2　潮位差と代表粒径による河川の散布図

（「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書　平成 16 年 5 月」より）

２．２ 河口写真

全国の一級水系の主要河川の河口部について、現在および過去（1961 年～ 1978 年）の空中写真を紹介する。なお最新の空中写真は、「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書」（平成 16 年５月、河川環境管理財団編集）より引用したもの、事務所で撮影した最新のものおよび国土地理院撮影の最新の空中写真を使用した。過去の空中写真は国土地理院撮影の空中写真を使用した。なお、これらの空中写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号 平 19 総複、第 172 号）

表 2-2 全国の主要河川一覧

管轄地方整備局	水系番号	河川名	流域面積 (km^2)	幹線流路延長 (km)	平均流量 (m^3/s)
北海道	1	天塩川	5,590	256	109.99
	2	渚滑川	1,240	84	26.83
	3	湧別川	1,480	87	27.25
	4	常呂川	1,930	120	21.55
	5	網走川	1,380	115	14.33
	6	留萌川	270	44	10.13
	7	石狩川	14,330	268	112.79
	8	尻別川	1,640	126	58.79
	9	後志利別川	720	80	21.86
	10	鵡川	1,270	135	31.18
	11	沙流川	1,350	104	38.45
	12	釧路川	2,510	154	25.70
	13	十勝川	9,010	156	71.16
東北	14	岩木川	2,540	102	90.25
	15	高瀬川	867	64	18.31
	16	馬淵川	2,050	142	65.31
	17	北上川	10,150	249	380.92
	18	鳴瀬川	1,130	89	26.56
	19	名取川	939	55	16.85
	20	阿武隈川	5,400	239	59.72
	21	米代川	4,100	136	110.36
	22	雄物川	4,710	133	314.90
	23	子吉川	1,190	61	81.27
	24	最上川	7,040	229	436.66
	25	赤川	857	70	75.73
関東	26	久慈川	1,490	124	24.06
	27	那珂川	3,270	150	90.71
	28	利根川	16,840	322	256.21
	29	荒川	2,940	173	30.48
	30	多摩川	1,240	138	41.05
	31	鶴見川	235	43	10.83
	32	相模川	1,680	109	-
	33	富士川	3,990	128	58.94
北陸	34	荒川	1,150	73	144.84
	35	阿賀野川	13,761	210	451.22
	36	信濃川	12,597	367	518.39
	37	関川	1,149	64	50.48
	38	姫川	722	60	60.53
	39	黒部川	682	85	17.20
	40	常願寺川	368	56	16.85
	41	神通川	2,720	120	151.26
	42	庄川	1,180	115	34.24
	43	小矢部川	667	68	32.94
	44	手取川	809	72	83.22
	45	梯川	271	42	18.56
中部	46	狩野川	852	46	22.44
	47	安倍川	567	51	＊ 41.44
	48	大井川	1,280	168	36.13
	49	菊川	158	28	1.54
	50	天竜川	5,090	213	135.11
	51	豊川	724	77	14.55
	52	矢作川	1,830	118	18.09
	53	庄内川	1,010	96	＊ 26.21
	54	木曽川	9,100	229	168.78
	55	鈴鹿川	323	38	5.12
中部	56	雲出川	550	55	8.77
	57	櫛田川	436	87	13.35
	58	宮川	920	91	38.43
近畿	59	由良川	1,880	146	39.47
	60	淀川	8,240	75	163.46
	61	大和川	1,070	68	15.00
	62	円山川	1,305	68	＊ 37.40
	63	加古川	1,730	96	27.89
	64	揖保川	810	70	＊ 29.04
	65	紀の川	1,750	136	31.68
	66	熊野川	2,360	183	123.44
	67	九頭竜川	2,930	116	105.07
	68	北川	211	30	9.76
中国	69	千代川	1,190	52	38.98
	70	天神川	490	32	13.28
	71	日野川	870	77	22.46
	72	斐伊川	2,070	153	39.27
	73	江の川	3,900	194	51.49
	74	高津川	1,090	81	＊ 51.88
	75	吉井川	2,110	133	41.44
	76	旭川	1,810	142	38.99
	77	高梁川	2,670	111	44.20
	78	芦田川	860	86	5.90
	79	太田川	1,710	103	56.40
	80	小瀬川	340	59	9.53
	81	佐波川	460	56	9.38
四国	82	吉野川	3,750	194	75.57
	83	那賀川	874	125	47.44
	84	土器川	140	33	0.74
	85	重信川	445	36	1.01
	86	肱川	1,210	103	18.97
	87	物部川	508	71	26.73
	88	仁淀川	1,560	124	80.88
	89	四万十川	2,270	196	88.56
九州	90	遠賀川	1,026	61	16.99
	91	山国川	540	56	14.59
	92	筑後川	2,863	143	78.38
	93	矢部川	647	61	13.00
	94	松浦川	446	47	9.68
	95	六角川	341	47	3.44
	96	嘉瀬川	368	57	10.99
	97	本明川	87	21	45.13
	98	菊池川	996	71	21.12
	99	白川	480	74	19.22
	100	緑川	1,100	76	23.91
	101	球磨川	1,880	115	89.76
	102	大分川	650	55	17.32
	103	大野川	1,465	107	54.95
	104	番匠川	464	38	9.97
	105	五ヶ瀬川	1,820	106	58.61
	106	小丸川	474	75	32.83
	107	大淀川	2,230	107	＊107.61
	108	川内川	1,600	137	70.94
	109	肝属川	485	34	26.38

出典：河川名は、2007 年３月現在の国土交通省河川局情報ホームページ「日本の川」参照。流域面積、幹川流路延長は「河川ハンドブック」（2006 年版）。平均流量は「河川便覧」（平成 18 年度版、＊平成 16 年度版）。

北海道

天塩川　1

留萌開発建設部　撮影

1964 年 9 月撮影

天塩川（てしおがわ）は、流域面積 5,590km²、幹線流路延長 256km を有する。北見山地の天塩岳付近に源を発し、名寄盆地を北上し、天塩平野に出て幌延町と天塩町の境を西へ流れるが、海岸目前で浜堤に行く手を阻まれ、海岸線沿いを 10km ほど南流したのち日本海に注いでいる。現在の河口部は導流堤が延長され、左岸側には、天塩港が建設されている。

渚滑川　2

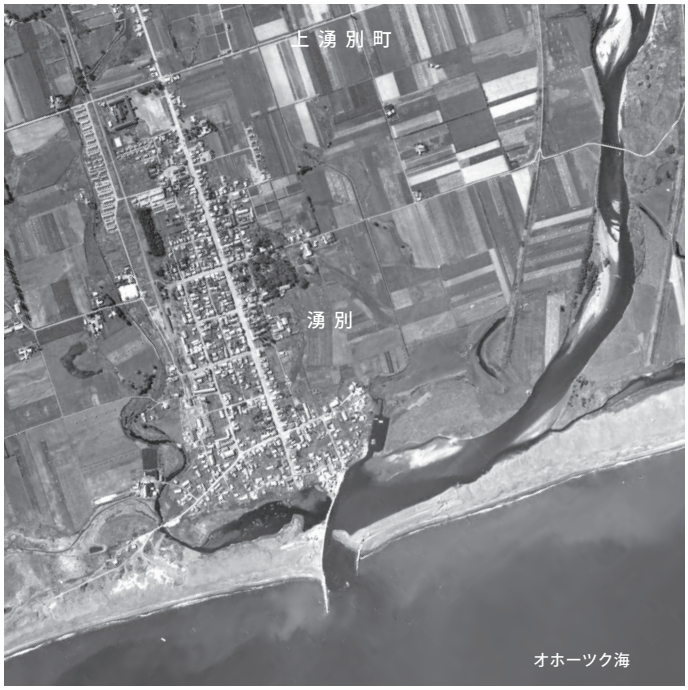
網走開発建設部　撮影（2002 年）

1964 年 9 月撮影

渚滑川（しょこつがわ）は、流域面積 1,240km²、幹線流路延長 84km を有する。北見山地の最高峰天塩岳の南側に源を発し、滝上町市街より上流で多くの渓流を合わせ、滝上町市街から紋別市上渚滑にかけては、台地を深く切り込んだ渓谷となっており、その後、紋別市西部を北に流下し、オホーツク海に注いでいる。

湧別川　3

網走開発建設部　撮影（2002 年）



1964 年 9 月撮影

湧別川（ゆうべつがわ）は、流域面積 1,480km²、幹線流路延長 87 kmを有する。北見山地の天狗岳に源を発し、遠軽町市街より上流では渓流河川、これより下流では激しく蛇行しながら北に流路を向け流下し、湧別町でオホーツク海に注いでいる。河口部は、導流堤（S.49 年竣工）の東側に漁港が整備されるなど大きく変貌を遂げている。

常呂川　4

網走開発建設部　撮影（2002 年）

1974 年 7 月撮影

常呂川（ところがわ）は、流域面積 1,930km²、幹線流路延長 120km を有する。大雪山系の十勝、石狩、北見の分水嶺となる三国山に源を発し、置戸町市街より上流では山間渓流の自然河川、置戸町市街より下流から北見市、端野町までは瀬と淵が交互にみられながら東北東に向け流下し、これより下流は北よりに流路を向けゆるやかな流れで大きな蛇行を繰り返し、常呂町でオホーツク海に注いでいる。

網走川　5

網走開発建設部　撮影（2002 年）

1974 年 7 月撮影

網走川（あばしりがわ）は，流域面積 1,380km²、幹線流路延長 115km、を有する。阿寒山系に源を発し、山間部を流下して津別町で平野部に出る。その後、津別川、美幌川等を合わせて美幌町を貫流し、女満別町において湛水面積 34.1km² の網走湖に入り、さらに北流して網走市街を流れてオホーツク海へ注いでいる。河口部は、左岸導流堤及び消波堤に囲まれた網走港が位置している。

留萌川　6

留萌開発建設部　撮影

1978 年 9 月撮影

留萌川（るもいがわ）は、流域面積 270km²、幹線流路延長 44km を有する。北海道留萌市と小平町の境にあるポロシリ山に源を発し、幾つもの渓流を合わせながら、留萌市の中心を西北に流下し、大和田遊水地を通り留萌市街部で日本海に注いでいる。河口部左岸には留萌港が位置している。

石狩川　7

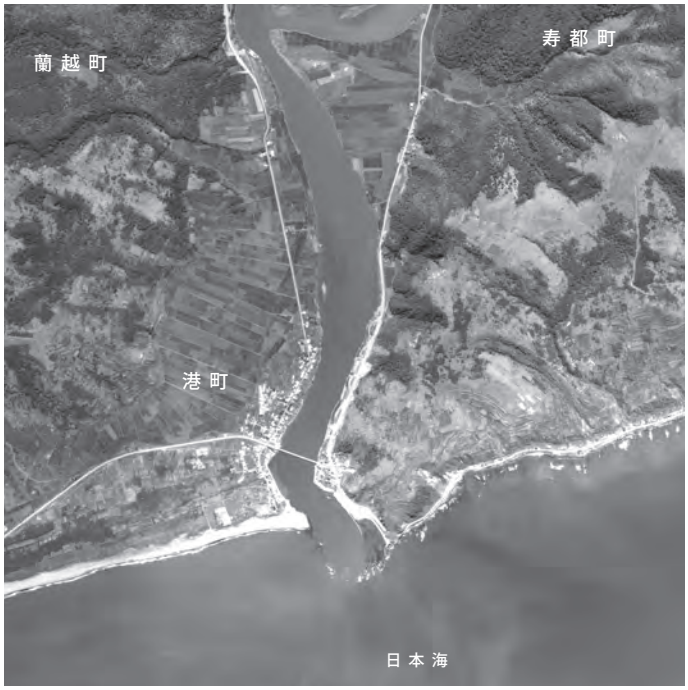
石狩川開発建設部　撮影

1966 年 7 月撮影

石狩川（いしかりがわ）は、流域面積 14,330km^2、幹線流路延長 268km を有する。雪山系の石狩岳に源を発し、層雲峡に代表される渓谷を流下して上川盆地に至り、道北の拠点都市旭川市で忠別川、美瑛川等の支川を合わせ、神居古潭の狭窄部を下って石狩平野に入り、石狩平野に入ると雨竜川、空知川、幾春別川、夕張川、千歳川等の支川を集め、最後に札幌市の中心部を流れる豊平川を合わせ、石狩湾で日本海に注いでいる。河口部右岸には導流堤が整備されている。

尻別川　8

小樽開発建設部　撮影



1966年9月撮影

尻別川（しりべつがわ）は、流域面積1,640km²、幹線流路延長126kmを有する。北海道南西部に位置し、支笏湖との分水界をなすフレ岳（標高1,048m）に源を発し、喜茂別川等の支川を合わせながら羊蹄山麓を流れ、蘭越町港で日本海に注いでいる。

後志利別川　9

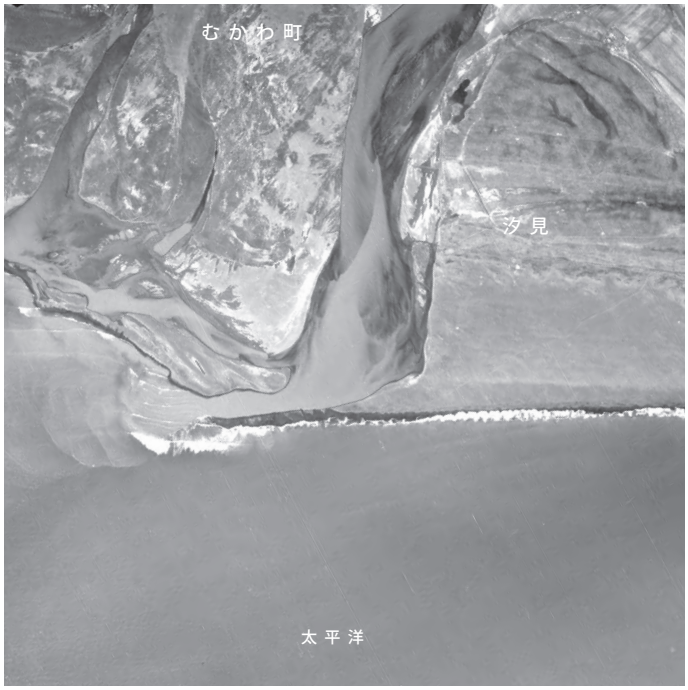
函館開発建設部　撮影

1976 年 7 月撮影

後志利別川（しりべしとしべつがわ）は、幹線流域面積 720km²、流路延長 80km を有する。北海道の長万部岳の西部に源を発し、美利河ダムを経て檜山支庁管内を流れ、せたな町から日本海へ注いでいる。その流域は今金町の全域とせたな町の一部の２町で形成されている。流域一帯は、川の恵みで土壌が肥沃なうえ、気候も比較的温暖なため、明治以来、平野部を中心に農業を主体とした産業が発展してきている。

鵡　川　10

室蘭開発建設部　撮影（1999 年）

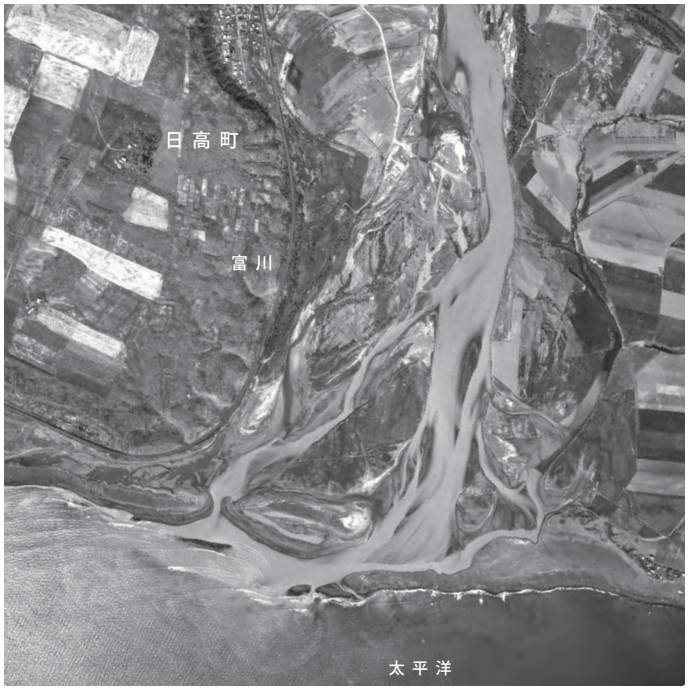


1963 年 5 月撮影

鵡川（むかわ）は、流域面積 1,270km^2、幹線流路延長 135km を有する。日高山脈北部のトマム岳に源を発し、占冠村の盆地において、パンケシュル川、双珠別川等を合わせ、赤岩青巌峡（あかいわせいがんきょう）、福山渓谷を流下し、穂別市街地で穂別川を合わせ、鵡川町で山峡の地を離れ、武川市街地を南西に流下し、太平洋に注いでいる。河口部に広がる干潟環境は、シギやチドリなどが飛来する渡り鳥の中継地として注目されている。

沙流川　11

室蘭開発建設部　撮影（1999 年）



1963 年 5 月撮影

沙流川（さるがわ）は、流域面積 1,350km^2、幹線流路延長 104km を有する。北海道沙流郡日高山脈に源を発し、千呂露川などを合わせ、日高町市街部を出てさらに渓谷を流下して平取町に入り、額平川などを合わせ、門別町において太平洋に注いでいる。上流部は切り立った渓谷で、中流になると河岸段丘となり、下流部は扇状地となっている。河口部の河道整備が進み、低水路は固定化されている。

釧路川　12

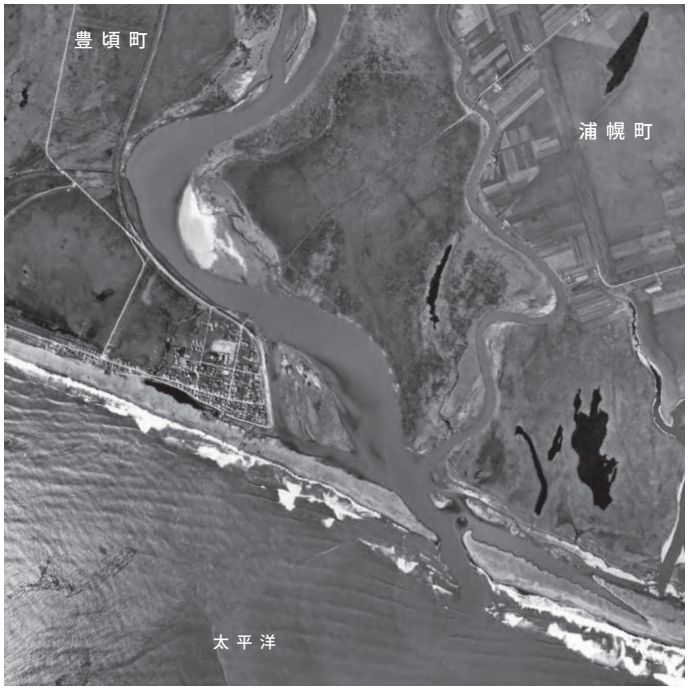
釧路開発建設部　撮影（2006 年）

1967 年 5 月撮影

釧路川（くしろがわ）は、流域面積 2,510km²、幹線流路延長 154km を有する。屈斜路湖に源を発し、蛇行しながら緩流し、弟子屈町中心部を貫流して標茶町市街地付近で南西に転じ、釧路平野東部の緑を根室段丘に沿って流れ、釧路湿原を蛇行しながら南流し、釧路町の岩保木西麓から新釧路川を通って釧路市街を貫流し、釧路港より太平洋に注いでいる。

十勝川　13

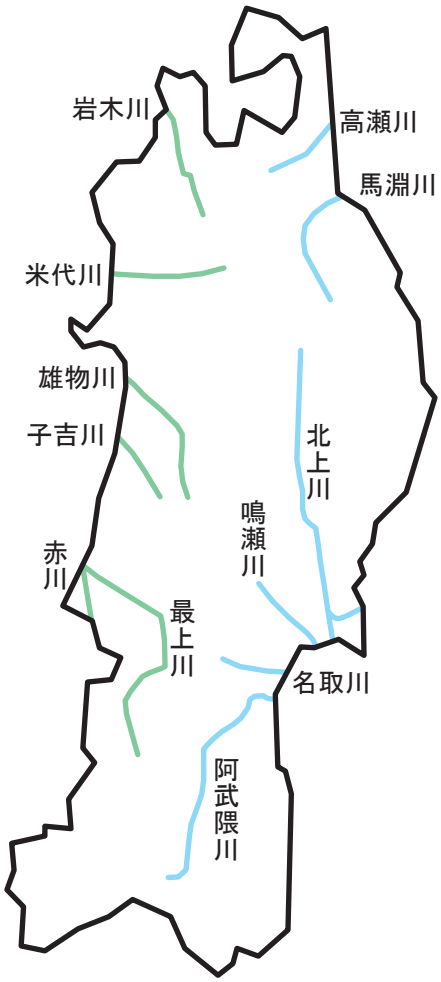
帯広開発建設部　撮影



1963 年 10 月撮影

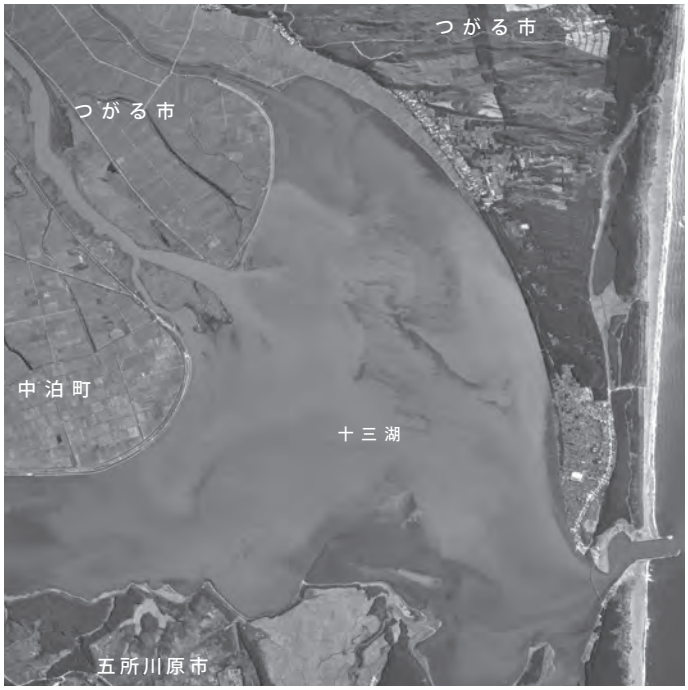
十勝川（とかちがわ）は、流域面積 9,010km²、幹線流路延長 156 kmを有する。北海道の屋根、大雪山連峰十勝岳に源を発し、佐幌川、芽室川、美生川、然別川等を合わせて十勝地方の中心都市に達する。ここから水量も増大し音更川、札内川、士幌川、途別川、猿別川、さらに利別川等と合流しながら統内原野を直進して中川郡豊頃町大津において太平洋に注いでいる。近年の河道整備により、河口部の流路は変貌している。

東　北



岩木川　14

青森河川国道事務所　撮影



1969 年 9 月撮影

岩木川（いわきがわ）は、流域面積 2,540km²、幹線流路延長 102km を有する。神山地の雁森岳（標高 987m）に源を発し、岩木山南麓を弘前市まで北東に流れ、弘前市から概ね北流に転じ、津軽平野を潤す。津軽半島西部を流れ、河口近くに十三湖を形成したのち日本海に注いでいる。

高瀬川　15

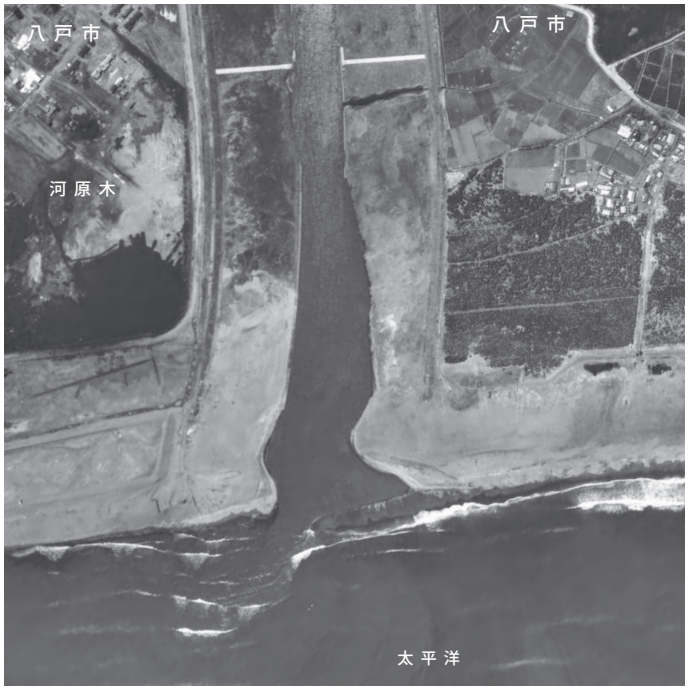
高瀬川河川事務所　撮影（2002 年）

1963 年 6 月撮影

高瀬川（たかせがわ）は、流域面積 867km^2、幹線流路延長 64km を有する。青森県上北郡七戸町、奥羽山脈の八幡岳（標高 1,020m）東麓に源を発し、東流して和田川、作田川が七戸町で合流し、七戸川となる。その後、坪川、中野川を併せた辺りから高瀬川と呼ばれるようになる。三本木原北部を潤し、小川原湖南西部に流入する。さらに湖北東部から北東に流れ太平洋に注いでいる。下流部は低湿地のため、河口部に位置する小川原湖は汽水湖となっている。

馬淵川　16

青森河川国道事務所　撮影



1961 年 4 月撮影

馬淵川（まべちがわ）は、流域面積 2,050km²、幹線流路延長 142km を有する。岩手県下閉伊郡と岩手郡の境にある袖山（標高 1,215m）に源を発し、高原状の北上山地と脊梁奥羽山脈の山隘を北流し青森県に至り、その流路を北東に転じ、八戸市を貫流して太平洋に注いでいる。河口部は、八戸港の埋め立て開発や都市化の進展により著しい変貌を遂げている。

北上川　17

北上川下流河川事務所　撮影

1963 年 5 月撮影

北上川（きたかみがわ）は、流域面積 10,150km²、幹線流路延長 249km を有する。岩手県岩手郡岩手町の御堂にその源を発し、東側の北上高地と西側の奥羽山脈から流れ下る大小多数の支川を合わせ、盛岡市、北上市、奥州市、一関市などを通って岩手県のほぼ中央を北から南へと流れる。宮城県に入り、津山町柳津地先で旧北上川と分かれる。その後放水路を経て、石巻市相野谷字飯野川町で東へ向き追波湾に注いでいる。旧北上川はそのまま南流し石巻市市街を貫流して石巻湾に注いでいる。

鳴瀬川　18

北上川下流河川事務所　撮影

1961 年 5 月撮影

鳴瀬川（なるせがわ）は、流域面積 1,130km^2、幹線流路延長 89km を有する。宮城県北部を流れ、船形連峰の船形山（標高 1,500m）を源流として北流したのち、漆沢ダムを経て概ね東に流路を変える。中流域では大崎平野の南部を流れ、北側を並行して流れる江合川（荒雄川、北上川水系）と共に宮城県北部の穀倉地帯を成す。かつて鳴瀬川と江合川は流路が錯綜していたが、現在は新江合川が開削されるなど整備された。美里町東部から徐々に南東流に転じ、東松島市野蒜で石巻湾に注いでいる。

名取川　19

国土地理院　撮影（2006 年）

1961 年 5 月撮影

名取川（なとりがわ）は、流域面積 939km²、幹線流路延長 55km を有する。奥羽山脈の大東岳（標高 1,366m）に源を発し、上流域は渓谷で、二口温泉がある。秋保大滝を経てからは川にそって馬場、長袋、境野、湯元と細長い盆地が数珠繋ぎに連なる。秋保温泉はそのうちの湯元にある。仙台市の山田で仙台平野に出る。広瀬川をあわせ、仙台市を東流し、名取市平閑上で太平洋に注いでいる。河口付近で貞山運河と連絡し、北に井戸浦に通じる。もとは南の閑上漁港と広浦にも通じていたが、今では漁港が海に出口を設けたため遮断された。

阿武隈川　20

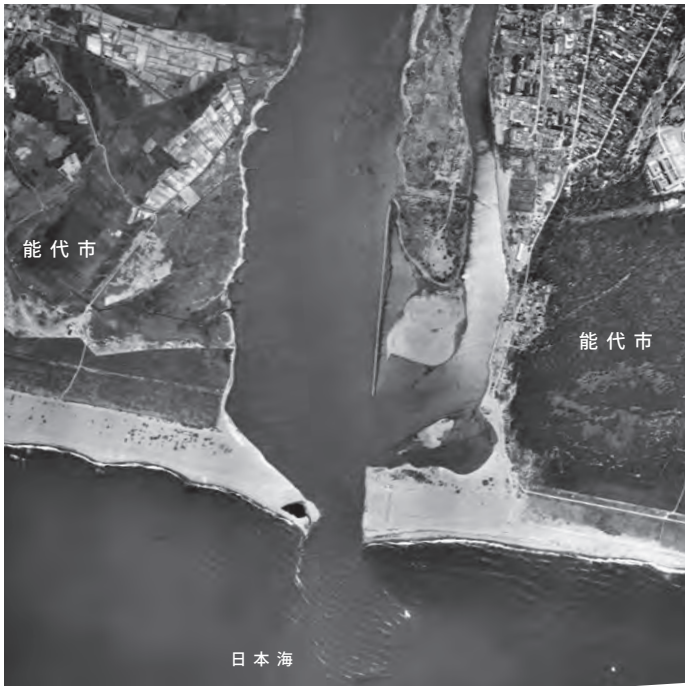
仙台河川国道事務所　撮影

1961年5月撮影

阿武隈川(あぶくまがわ)は、流域面積5,400km²、幹線流路延長239kmを有する。福島県、宮城県を流れ、福島県西白河郡西郷村の旭岳に源を発し、東流して白河市に入り西白河郡中島村付近で北に流れを変えると須賀川市、郡山市、福島市と県内を縦断するように流れ、宮城県伊具郡丸森町で角田盆地に入り、角田市を流れて仙台平野に出る。岩沼市と亘理町の境で太平洋に注いでいる。

米代川　21

能代河川国道事務所　撮影

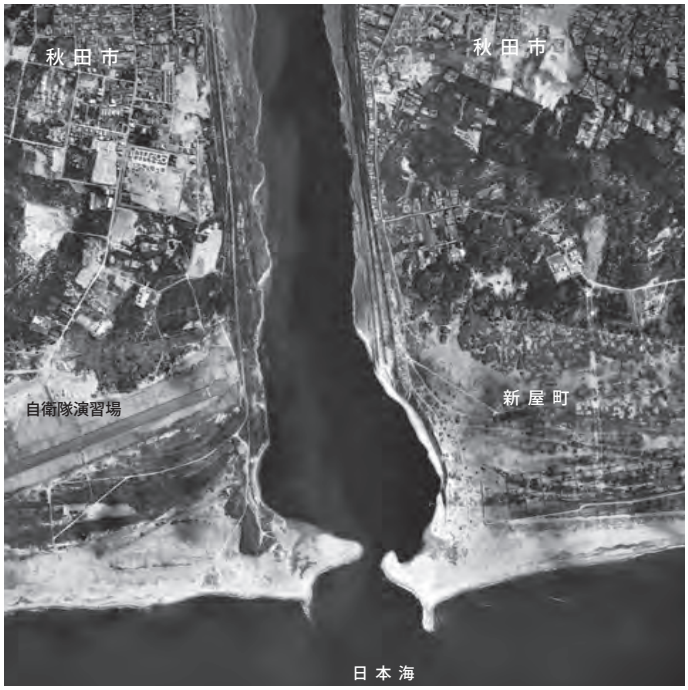


1963年5月撮影

米代川（よねしろがわ）は、流域面積4,100km²、幹線流路延長136kmを有する。秋田県北部を流れ、奥羽山地の中岳（標高1,024m）から南流する切通川と、八幡平北麓に源を発し、北流する兄川が岩手県八幡平市兄畑で合流し、米代川と名を変える。程なく秋田県に入り北流、鹿角市毛馬内からは概ね西流する。その後、大館市南部をかすめ、北秋田市（阿仁地方）を北流してきた阿仁川を二ツ井町で併せ、能代市で日本海に注いでいる。河口部左岸は、能代港と通じていたが今では港の出口を海に向けため遮断された。

雄物川　22

秋田河川国道事務所　撮影



1962 年 10 月撮影

雄物川（おものがわ）は、流域面積は 4,710km²、幹線流路延長約 133km を有する。山形県、宮城県との県境付近の大仙岳に源を発し、穀倉地帯である横手盆地を流れ、その後、神岡町から雄和町にかけて蛇行しながら流下する。秋田市において日本海へ注いでいる。秋田県の南半分を流域とする。かつては土崎港（秋田港）内に河口があった。大正から昭和にかけて洪水防止のための大改修が行われ、新たな放水路が昭和 13 年、現秋田市勝平地区に開削された。

子吉川　23

秋田河川国道事務所　撮影

1962 年 8 月撮影

子吉川（こよしがわ）は、流域面積 1,190km²、幹線流路延長 61km を有する。秋田県鳥海町と山形県遊佐町の境にある鳥海山に源を発し、秋田県南部を流れ、鳥海山（標高 2,236m）や丁岳山地（ひのとだけ山地）の三滝山（標高 986m）、兜山（標高 980m）等の渓流を集めて北西流、本荘平野の穀倉地帯を形成しつつ由利本荘市街西部で日本海に注いでいる。河口部右岸には、本荘マリーナ、本荘港が位置している。

最上川　24

酒田河川国道事務所　撮影

1962年10月撮影

最上川（もがみがわ）は、流域面積7,040km²、幹線流路延長229kmを有する。福島県との県境の吾妻山付近に源を発し、山形県中央部を北に流れ、新庄市付近で西に向きを変え酒田市で日本海に注いでいる。河口部右岸には、酒田港が位置しており、港口の出口は導流堤により海に向けている。左岸側に京田川が流入している。

赤　川　25

酒田河川国道事務所　撮影

1962 年 9 月撮影

赤川（あかがわ）は、流域面積 857km²、幹線流路延長 70km を有する。山形県、新潟県境の朝日山系以東岳付近に源を発し、大島池を経て渓谷を流れる大島川と田麦川を支川にもつ梵字川の 2 つの支川が合流する。その後、庄内平野を北流し、内川、青竜寺川、大山川等の支川と合流し、鶴岡市、三川町を通り、酒田市で日本海に注いでいる。